

保育所における保育者と保護者の「対話の場」による

子育て支援の可能性

—保護者の語りの分析を通して—

橋本 翼

Possibilities of “Parents Meeting with Nursery School Teachers”

To Support Parents in a Nursery School

— through Interviews with Parents —

Tsubasa Hashimoto

Abstract

The purpose of this study is to find some ways to support parents effectively in nursery schools. I have been visited a nursery school from 2015, and tried to support parents in the nursery school. I interviewed five parents who have children with special needs, that have taken part in “Parents meeting with nursery school teachers”, named “Hotto Saron”.

The results were as follows; First, the Parents had different needs for “Hotto Saron”. They gradually had “sense of reducing stress about childcare”. Second, they found that “their child had changed better”. Third, they found that “the relationship with parents who had attended “Hotto Saron” was changed friendly”. Forth, they also found that “the relationship with nursery teachers was changed better”.

Through these experiences, parents were encouraged to care their children and felt to be supported from nursery school teachers. Through these results, I suggested that it was important for parents to be able to take part in “Parents meeting with nursery school teachers”. In addition, it is necessary that any support to nursery school teachers to improve parents support in nursery schools.

Key Words: parents support, nursery school, the way to support
nursery school teachers

問題と目的

・はじめに

筆者は共同研究者と共に、2015年3月より私立保育園A園を定期的に訪問し、保育者と研究者の”協働“のあり方を探るべく、フィールドワークを継続中である。(垂見・橋本;2015、垂見・橋本;2016、橋本・垂見;2016、垂見・橋本;2017a、橋本・垂見;2017、垂見・橋本;2017b)。

保育所における保護者への支援については、平成20年告示の「保育所保育指針」第6章の中で保育士等の業務として明示されている。保育所が行う子育て支援に関しては、「保育所に入所している子どもの保護者に対する支援」と「地域における子育て支援」に大別される。保育所は、地域の子育て支援の拠点として、子どもの最善の利益を考慮し、保護者と協力関係を築き、必要に応じて個別の支援の機会を作ることが求められている。

しかし保育現場で働く保育者からよく聞かれる声は、「保護者対応の難しさ」である。保育現場は限られた人員配置、多忙な業務の中で、それぞれ試行錯誤しながら子育て支援のよりよい形を模索しているのが現状であると思われる。保育所における保護者支援に関しては、これまで様々な研究が行われてきた(松井・森(2013)、岸本・武藤(2014)、中平・馬場・竹内・高橋(2016)など)。木曾(2014)は発達障害傾向児とその保護者への支援に関する保育士への質問紙調査を用いた研究の結果、保育士は「保護者に子どもの様子をいつどのように伝えたらよいか悩む」という項目に関しては、7割の保護者が該当すると回答したと述べている。また木曾(2016)は、保育士への質問紙調査の結果から、保育士は未診断の発達障害の傾向のある子ども本人への対応よりも、保護者に子どもの状態を伝えることに心理的負担を感じる傾向があると述べている。

以上の研究結果からは、保育者にとって保護者支援の実践が困難に満ちたものであると認識されていることが分かる。しかし「どうすれば」保育者が有効に子育て支援を行うことができるのかを明らかにした研究は殆ど見られない。保育者にとって、「保育巡回相談」や「保育カウンセラー」など、外部の専門家との連携は保護者支援の有効な手段であるが、財政上の課題からこうした専門家との連携が十分にできるとは言い難い自治体も存在する。筆者は「保育所において保育者と研究者が「協働」し、保育者の行う子育て支援を支援する」ことを念頭に置いて調査を継続してきた。本研究では、筆者と保育者の協働の下、A園において開催され発展してきた、保育者と保護者が子どもの育ちについて語り合う場を「対話の場」と名付け、「対話の場」の参加経験が保護者にどのような体験として意味づけられているのかを、保護者へのインタビュー調査の語りの分析を通して明らかにすることを目的とする¹⁾。それにより保育所における子育て支援活動の新たな視点と可能性について考察を加えることとする。

¹⁾本研究の一部は日本保育学会第70回大会において発表された。

・データの収集方法および表記

2015年3月よりA園を来訪した際の観察記録および保育者とのやりとりを行った際の筆者、および共同研究者のフィールドノート（以下FNと記載）、および録音データ逐語録を分析に使用した。訪問の頻度は隔週1回程度、1回の滞在時間は4時間程度である。本研究では2015年3月より2016年12月末までに収集したデータを使用する。来訪回数は、57回であった。（なお、以下筆者発言を〈 〉、保護者および保育者の発言を「 」で表記する。）

・「対話の場」の成立過程

来訪当初（2015年3月時）の保育園側のニーズは、「気になる」子どもが多く、対応に苦慮しており、助言が欲しいというものであった。子どもの行動観察および、チェックリストによるスクリーニングを通して、子どもへの具体的な手立てを保育者と共に協議していった。その中で「気になる」子どもに対し、保護者に「気になる」様子を伝えても深刻に受け取られなかったりする悩みや、仮に療育につないでも、保護者の意識が変わらないと続かないという悩みが保育者から語られ、保護者への啓蒙として「茶話会」を開催することを著者より提案した（2015年6月24日FN記録より抜粋）。「茶話会」は当時の障がい児保育担当の保育者B先生により、「ほっとサロン」と名づけられることとなり、2016年1月に第一回のホットサロンが開催され保育者側から好評価を得られたため、定期的に開催されることとなった。第2回「ほっとサロン」（2016年2月26日）後に行った参加保育者へのインタビューでは、C先生（当時年少クラス担任）が、保護者集団と会話する際はどうしても園への批判が主になっている現状を指摘し、「**こういうほっとサロンち（つて）、子どものことが中心だから、子どものことを話してくれるのがすごくうれしい**」と語り、B先生は保育園から小学校へ上がった際の相談の受け皿が急に無くなってしまい、保護者の不安に言及し、「ほっとサロン」が卒園後の保護者のアフターフォローの役割を担えるのではないかと期待し、「**なんかちょっとほっとサロンあつきたいですね**。」と今後の発展に意気込みを示している。（2016年3月25日FN）。その後も「ほっとサロン」は月一回のペースで開催されることとなった。表1に、第1回（2016年1月）～第9回（2017年1月）までの「ほっとサロン」の概要を示す。

「ほっとサロン」と並行して、適宜開催することとなった「対話の場」は、筆者と保護者との個別懇談会であった。集団の中ではなかなか自分の意見が言いにくいという保護者や、じくり子どもに関する悩みを話したいという保護者に対し、各担任から個別に声をかけ、適宜相談会を実施した。B先生により「プチサロン」と命名された相談会は、より個別カウンセリングに近い形態となっており、保護者の了承が得られれば原則担任保育士が同席することになっている。

また、保育者と保護者との「対話の場」も設定された。2016年5月よりA保育園では、3歳児クラス以上のクラスで保護者との個人面談を実施することとなった。その後2017年2月にも個人面談は実施されており、保育者と保護者の「対話の場」に関しても展開が見られている。

表 1 「ほっとサロン」の概要

(2016 年 1 月～2017 年 1 月)

回数	実施時期	保護者数(人)	保育士数(人)	テーマ	形式
1	2016 年 1 月	2	3	幼児期の子育てのヒント	講話＋フリートーク
2	2016 年 2 月	4	4	ほめる子育てのすすめ	講話＋フリートーク
3	2016 年 4 月	5	5	思春期の「こころ」と親子関係	講話＋フリートーク
4	2016 年 5 月	11	4	「ひっこみじあんな子ども」・ 「ナイーブな子ども」へどう向き 合う？	講話＋フリートーク
5	2016 年 7 月	3	3	子どもの上手な「叱り方」とは？	講話＋フリートーク
6	2016 年 8 月	4	4	こんなとき、どうする？	講話＋フリートーク
7	2016 年 9 月	3	3	フリートーク	フリートーク
8	2016 年 12 月	2	2	子どもの成長の「個人差」に 合わせた子育てとは？	講話＋フリートーク
9	2017 年 1 月	2	1	子どもへの対応を見直してみませ んか？	講話

・「ほっとサロン」の概要に関して

「ほっとサロン」は以下のような手順で開催される。まず B 先生と筆者で、保護者が関心を持ちそうなテーマについて協議する。テーマは保護者が子育てで困りそうな場面に即した内容になっており、例えば子どものかんしゃくへの対応、上手な注意の仕方、ナイーブな子どもへの配慮など、「気になる子ども」の行動特性を保護者にわかりやすく伝えることを意図している。園全体の保護者に呼びかけ、希望された保護者が参加する形態をとっている。テーマをもとに毎回筆者がレジュメを準備し、15 分程度の講話を行う。その後保護者からの質問や意見をもとに筆者や参加保育者が答えていく、という形式をとっている。テーマを設定することで、保護者にとっては話したい内容を整理することができ、意見交流も活発になる印象を筆者は持っている。会には保護者の人数とバランスが取れるよう、可能な限り参加保護者の子どもの在籍クラス担任保育者にも参加を依頼している。開催頻度は月一回であり、時間は平日夕方の 16：30～18：00 であった。仕事のため参加が難しい保護者の中には、講話部分で使用する資料を希望する保護者の方もおられる。毎回の最後にアンケートを書いていただき、次回のテーマ設定の際の参考にしている。

方法

・インタビューの概要

B先生を通して「ほっとサロン」参加経験のある保護者に対しインタビュー調査の依頼を行い、同意が得られた保護者5名に2016年12月にA園にてインタビュー調査を行った。調査協力者の同意を得てインタビュー調査の内容を録音し、逐語録をデータとして使用した。一回当たりの面接時間は30分～50分であった。表2に調査協力者の概要を示した。調査協力者の子ども（在園児）は5名中4名が、市の療育教室に定期的に通所している、保育現場における「気になる子」の保護者である。調査内容としては、保護者に「ほっとサロン」に参加した経験を自由に語ってもらい、「ほっとサロン」の参加経験が子どもへの接し方や保護者自身の心境、さらに保育者との関係性の変化にどのような影響を与えたのかを尋ねた。

表2 調査協力者の概要

イニシャル	在園児在籍クラス（性別）	「ほっとサロン」参加回数
Cさん	4歳（男児）	10
Dさん	4歳（女児）・1歳（女児）	2
Eさん	5歳（女児）・2歳（女児）	1
Fさん	5歳（男児）	3
Gさん	5歳（男児）・0歳（女児）	7

（2016年1月～2017年4月まで。イニシャルは仮名）

・倫理的配慮

調査協力者に対してインタビュー開始時に本研究の目的を説明し、研究として公表することの同意を得た。調査協力者の匿名性を保持するため、家族情報の細部は変更を加えている。イニシャルは仮名である。また、本論文の全文をA保育園の園長に提示し、内容に関する許諾を得た。

結果と考察

以下に保護者の語りの分析結果を、「参加初期の経験」「保護者の心理的負担感の軽減」「子どもの肯定的変化の実感」「保護者同士の関係性の変化」「保育者との関係性の変化」に分けて記述することとする。

A) 参加初期の経験

保護者は日々の子どもへの対応に迷い、子どものことを話せる場を求めている。保育者からの勧めがきっかけで参加を決めるが、保護者の側のニーズは様々である。率先して参加する保護者だけでなく、子どもの気になる行動のヒントを得たいと意を決して参加する保護者もいる。

「悩みがいっぱいあったので…そういう場があるならぜひ参加したいと思いました。(Cさん)」

「ちょうどつめかみも気になってた時だったので、あと精神的に弱いところもあるので(ナイーブな子どもへの接し方というテーマの会に参加：筆者注)(Dさん)」

「ほっとサロン」に参加し、他の保護者と子どもについて語り合うことで、子育てについて悩んでいるのは自分だけではないことを知り、「対話の場」に対する安心感が生まれる。

私一人だけ悩んでるんじゃないっていうのが…(中略)、どこも一緒なんだとか、このご家庭はこういうお子さんの悩みがあるんだとか…(中略)そこが一番よかったのかなと思います。(Cさん)

いろんな家庭があって…(中略)、自分はどちらかと言えばあんまり深く考えてないやないかなって…(中略)、叱り方とかちょっと考えていかんなって。(Eさん)

その一方で、悩みを話しすぎたという後悔の感情が生じることもあるが、話したことを他者から受け止められることで、「対話の場」に対する安心感が保護者の側に生じる。

ずっと(自分の中で)ためてたものをばーっとはきだしてしまって(中略)、そんな時は「すいませーん」って思ったけど、後で考えてみるとそんな時から少しずつ自分の気持ちに、もうちょっとがんばらなっていくのができたかなって。(私の話を聴いて)あたしもこんなことで悩んでたらいかんねって言ってくれた人がいたらしくて。(Gさん)

保護者にとって、子どもについての悩みを批判されずじっくりと聴いてもらう経験は新鮮であり、自分の悩みが他の保護者の悩みを相対化する場合もあるという点に気づくことで、「体験の共有」が促進される。保護者同士がお互いの子どもに関する悩みを共有する中で時に他の保護者や「親としての保育者」にアドバイスする場面も見られるようになる。すなわち、「対話の場」がピアサポートの場として機能し始める。

B)保護者の心理的負担感の軽減

「ほっとサロン」へ参加を続ける中で、保護者の心理的な負担感が軽減されていく。Cさんはこだわりが強く、療育教室に通っている子どもへの接し方に、「余裕が出た」と表現し、以下のように語る。

「ほっとサロン」に行きだして、療育教室が、前は部屋に入るのもダメだったのが、行けるようになったんです。「ほっとサロン」はお母さん方と話ができるっていうのがありますね(療育教室との違い)。「ほっとサロン」に来てから私の気持ちが違うくって、(子どもも療育教室に)ちゃんと参加してくれてるのかなと思います。(Cさん)

怒る時はだいぶ落ち着いて怒れるようになったかな。私があんまり感情的にならない方がいいみたい。なんか(子どもが)だんだん、落ち着いてきますね。(Gさん)

怒り方が変わったと自分では思うんですよね。前はけっこうわーっ(と)言いよったんです。前怒った時「なんにも伝わってないんだ」っち思って。がみがみいうんじゃなくて順番いちおたどって、怒るようにはしてるんですけどね。(Eさん)

Cさんは「ほっとサロン」への参加を契機に自身の気持ちに余裕が出てきたことを自覚し、並行して子どもが療育に参加できるようになったことと関連付けて語っている。Eさん、Gさんは「ほっとサロン」の体験を契機に、子どもへの「怒り方」が変化してきたことを振り返って語っている。肥後（2009）は保育所入所児童の保護者へのアンケート調査から、保護者が子どもに対して腹立ちを感じる要因として、子どもの行動を制御できないという感覚である「制御困難」因子と、子どもからの働きかけを冷静に受け入れられない「受容困難」因子の存在を仮定している。ほっとサロンの参加経験が家庭内での子どもとの関わりに徐々に影響を与え始め、保護者の子どもに対する「受容困難性」は低減していき、結果として保護者の心理的負担感は軽減することとなる。

C) 子どもの肯定的変化の実感

保護者の心理的負担感が軽減することと軌を一にするように、保護者は子どもの肯定的な変化を感じ始めることとなる。

ちょっと我慢できるようになったっていうのは、あるかもしれないですね。(以前は)ギャーッと泣いて、ワーって言ってたのが、最近は減ってきてるのかなって思います。(Cさん)。

(妹におもちゃを取られたときに自分で気持ちを伝える練習をさせるようにしていると)自分でなんか「とったー」って(私に)言った後に「せんでー」っち(と妹に)言うようになってます。(Dさん)

(自分は)かーっとなったら(相手の言葉を)聞き取りにくいんだけど、OOも、(私が)分からんやったら何回聞き直しても言い返してくれるし、今まで「いやー」って言ってたのが、下の子の面倒もよく見てくれるし。(Gさん)

いずれの保護者も、子どもがどのタイミングで変化し始めたのかについては言及していないが、着実に子どもの行動に変化が生じていることを実感している。Cさんは子どもの行動調整能力が向上している点を評価しており、Dさんは子どもが年下のきょうだいとの間ではあるがささやかな自己主張にチャレンジしていることを評価している。またGさんも、子どもが自分に意思を伝えようと繰り返し言葉にしようとする試みをポジティブに評価している。ほっとサロンで保護者同士の話題に上がったり、筆者がホットサロンで提案したりした子どもへのかかわり方のヒント(例えば、子どもの気持ちを言葉にする、自己主張の練習をさせる、感情のままに怒らないなど)を日々の子育てにおいて実践していくことが、子どものささやかな変化に対する「気づき」を与えると共に、子どもに対しての「制御困難」感は低減していく。すると保護者の心理的負担感はさらに低減し、より子どもへの接し方に「余裕が出て」くるという好循環をもたらすのである。

D) 保護者同士の関係性の変化

「ほっとサロン」に参加する経験を重ねることで、保護者同士の関係性もささやかな変化が生じる。それまで深く関わっていなかった保護者同士が出会い、子育てに悩む立場＝親としての悩みを共有する体験は、保護者にとっては新鮮な体験である。自分の子育てを否定されず、悩みを共感してもらった体験は、保護者同士の親近感や連帯感を生むことにつながる。

ここに来たお母さんは、ゆっくり話したから、全然違うんですね、印象も、今まで顔も見ないで挨拶してたのが、顔を見て、子どものことちょっと話したりとか、「今日は寒いねー」っち(と)(相手の)子どもと話したりとか。そこが変わりましたね。(Cさん)

前はあいさつ程度やったけど、ちょっと一声くらいはかけるようになった気がします。(中略)ほっとサロンで話聞いたきでしょうね、あかちゃん抱いちゃったりしようじゃないですか、自然と言葉が出るじゃないけど、「たいへんでしょー」みたいな。その辺はちょっと変わったかなと思いますね。(Eさん)

保護者同士がささやかながら言葉を交わし合い、交流する雰囲気は、自然発生的に起こるものではない。それまで関心を持つ機会がなかった保護者の、「顔を覚えて」(Cさん)、一定時間子どものことについて悩みを共有したという体験が生み出したものである。保護者同士の交流はお互いの心の「余裕」から生じ、ちょっとしたやりとりがさらなる「余裕」を生み出すこととなる。Eさんの語りに見られるように、保護者同士が互いを気遣うという保護者の雰囲気の良い方向への変化とつながっていく。こうした好循環のプロセスが、保護者同士の関係性の変化においても着実に生じている。

E) 保育者との関係性の変化

「ほっとサロン」に参加する体験を通して、保護者の保育者に対するイメージが変化し始める。日々の保育の中では保護者は子どもを預ける側であり、保育者は子どもを預かる側である。保育者と保護者の関係は非対称的なものである。保育者の成育歴や性格、趣味趣向などが互いの間でやりとりされることはほぼ無いといっていいただろう。ところが「ほっとサロン」の場で保護者は、保育者の見えなかった一面を知ることになる。

やっぱり話す機会もないので、先生の個性も知れたような気がするし、(今まで)見えなかった所が見えて、距離が縮まったような気がしますね。(Dさん)

保育者の思春期の頃の話や「親として」の話を聞くことで、保育者に対する親近感を保護者は感じる。保育者の適切な自己開示は保護者との心理的距離感を縮める。話題によっては、保護者が保育者に「親として」助言を与える、という役割の逆転も生じることとなる。

(保育者の親としての悩みに助言したことに対して) 私もこうやってしたからおんなじことした方がいいよって、話せてよかったかなって。自分の経験もこうやって生かせるのかなって(Gさん)

Gさんの語りからは、子育ての先輩としての助言を「ほっとサロン」の場で他の保護者や保育者に伝えることで、親としての自信を回復していくプロセスを読みとることができる。「ほっとサロン」の場自体が、グループカウンセリング的に機能し、「ほっとサロン」の時間は、参加している保護者と保育者の関係は対称的かつ対等な関係に変化している。

保護者は保育者に対して、信頼感を抱いているからこそ「ほっとサロン」に参加してみてもという保育者からの勧めを受け入れる。日々の保育の中で培われた子どもと保育者との信頼関係を保護者は実感し、安心して子どもを預けることができる。

H先生(担任)はすごく話しやすい先生ですね。他の先生も一生懸命さがすごく伝わるので、子どもはやっぱりついていくよねって思います。(Cさん)。

(保育者は)相談してもらってちゃんと返してくれるし、頼りになる存在ですね。(子どもに)一生懸命接してるのが伝わるし。A園の先生自体わりと自分の中では信頼してます。(Eさん)。

さらに「ほっとサロン」の経験は、保育者に対する信頼感をより強固なものにする。

前は何でも先生に言えなかったっていうか。いろんな方向から子育てのことを考えたりとか、そういう「視野」が私は狭かったんじゃないかって思うんですね。ちょっとしたことでも今は(先生に)報告して、何でも言える間柄になってきたと思います。(Cさん)

保育者と保護者がともに子どものことを考え、「対話する」機会が、「ほっとサロン」に参加する体験によってもたらされる。そこで得られた気づきや保護者と保育者の関係性の変化は、日常の保育場面においても継続し、保護者は「子どものことに対する悩みは保育者に相談すればなんとかなるかもしれない」という意識を持つようになるのである。したがって「ほっとサロン」の参加経験が、保護者と保育者の関係性をより良好なものへと変化させ、家庭と園が同じ方向を向いて子どもを支援することへとつながるのである。

一方で、保護者の中には、若手保育者が保護者の気持ちを理解するための機会として、「ほっとサロン」へ保育者が参加することを期待する方もいる。

(A園は)独身の、若い先生が多い印象なんで、私はその場にどんどん入っていたいで、お母さんたちの話を聞いてもらって、そしたら違うと思うんですね。独身の先生が多いなら、逆に「入っていただかないとだめじゃない」、って思います。(Cさん)

母親の子育てに関する悩みを独身の先生が聞くことが、母親の気持ちを理解することにつながるという語りである。若手保育者の「保護者支援の実践を学ぶ」場として「ほっとサロン」へ参加する体験が必要である、という上記の語りが保護者から語られた点は注目に値する。筆者が、保育者養成校において子育て支援の授業を担当している際に、学生の口からしばしば語られるフレーズは、「子どもを産んだことがないから親の気持ちは分からない」というものであるが、保護者も同様の感情を保育者に対して抱いている。つまり、保護者は保育者を「子育て支援の専門家」として認識してはならず、「子育てした経験のあるものにしか保護者の気持ちは分からない」と感じている可能性がある。だとすれば保護者が若手保育者から「わかってもらえた」と実感し、子育てに関する悩みを相談しようと思えるようになるには、通常の保育における保護者との関わりだけでは不十分であり、保護者と保育者が「対話」する場が必

要となってくると思われ、その一つの形態が「ほっとサロン」となって継続されていることの意義は十分に認められる。

総合的考察

本研究は、保育所における保護者と保育者との「対話の場」の一形態である「ほっとサロン」への参加経験が、保護者にとってどのような体験として意味づけられているかを、保護者へのインタビュー調査の分析を通して説明した。保護者は「ほっとサロン」を通して、「心理的負担が軽減」し気持ちに余裕を持てるようになる。それに伴って「子どもの肯定的変化」を徐々に実感し、親子関係の肯定的変化も付随して起こる。「他の保護者との関係性の変化」や「保育者との関係性の変化」も自覚し、さらなる心理的負担の軽減が図られる。図1に「ほっとサロン」によってもたらされた保護者の内面の変化のモデルを示す。

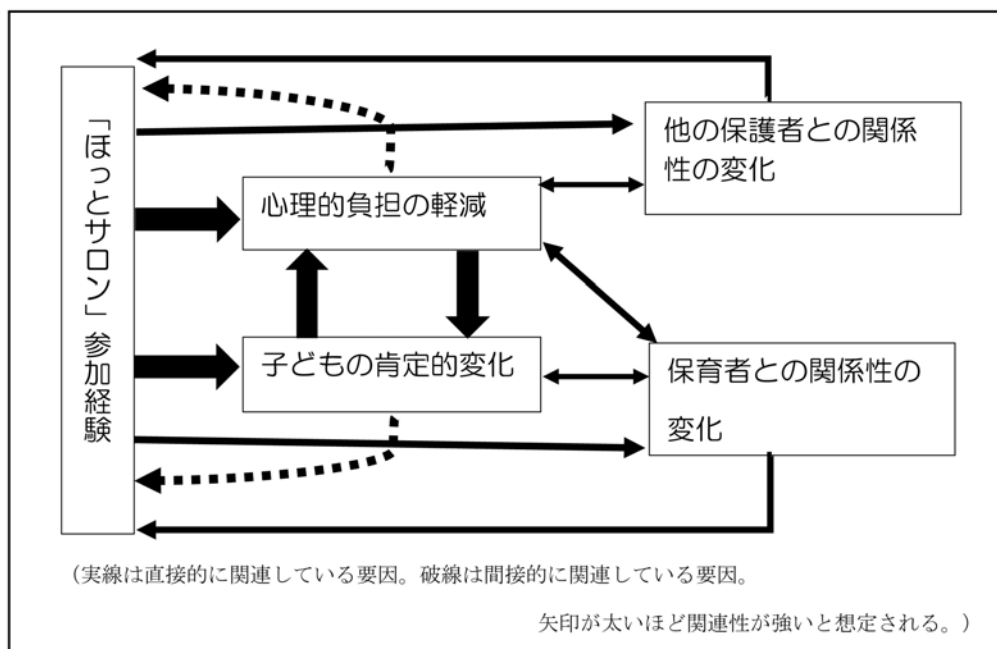


図1. 「ほっとサロン」によってもたらされた保護者の内面の変化

本研究の意義は、まず保護者にとって、保育者との「対話の場」を経験することが有効なサポート源となりうることを示した点にある。今回調査に協力いただいた保護者はいずれも子どもが療育機関を利用している「気になる子」の保護者であり、保護者の子育てに関する悩みや負担感は通常の育児相談のケースに比べて大きい。そうした保護者の情緒的サポート源の一つとして、「対話の場」が位置づけられるようになった。今回は「ほっとサロン」のみを取り上げたが、担任保育者による「個人面談」や「プチサロン」など、多様な「対話の場」が保護者に対して提供されるようになって

た点は、保育現場における子育て支援が発展していくプロセスと捉えることが可能である。それは筆者のような「外部の専門家」が意図して提案したものというよりは、保育者との「対話」を通して生まれてきたものである。もう一点の意義としては、「一定の保護者は子どものことを話すことができる場を求めている」という点である。本研究の結果は、保育所における子育て支援の一形態として、「対話の場」を設けることの有効性を示唆している。

いっぽう、本研究の限界と課題は以下のようなものである。インタビューに協力いただいた保護者はいずれも子どもへの接し方や対応の仕方に悩み、保育者に援助を求めてきている方であった。言わばすでに保育園側と保護者の間に信頼関係が十分に構築されていたと考えられる。しかし保育現場では、保育者が保護者に子どもに関する心配を伝えても、納得してもらえず、その後の支援に至らないケースも多くみられる。支援ニーズの表明自体が難しい保護者といかにつながっていくかという点に関しては今後質的研究を通して明らかにしていく必要がある。

子どもの日常の姿をよく知る保育者という存在は、保護者にとって最も「身近な」相談者であろう。A園におけるフィールドワークは現在も継続中であるが、保育現場における「保護者のニーズに合った子育て支援の在り方」について今後も探求していきたいと考える。同時に、「保育者が行う子育て支援を支援する」という、「支援者支援」の在り方についても探求していきたいと考えている。

文献

- ・橋本翼・垂見直樹（2016） 保育者と研究者との協働に関する探索的研究(2)― 保護者支援における協働のプロセス― 日本保育学会第69回大会発表論文集
- ・橋本翼・垂見直樹（2017） 保育所における保護者との「対話の場」がもたらしたものの（2）―保護者の視点から― 日本保育学会第70回大会発表論文集
- ・厚生労働省編（2008） 保育所保育指針解説書 フレーベル館
- ・岸本美紀・武藤久枝（2014）. 保護者が望む保護者支援のあり方―幼稚園と保育所の比較― 岡崎女子大学研究紀要 47, 17-24.
- ・木曾 陽子（2014）. 保育における発達障害の傾向がある子どもとその保護者への支援の実態 社会問題研究 63, 69-82.
- ・木曾 陽子（2016）. 未診断の発達障害の傾向がある子どもの保育や保護者支援と保育士の心理的負担との関連―バーンアウト尺度を用いた質問紙調査より― 保育学研究 54(1), 67-78

- ・ 守 功・松井剛太(2013). 保育現場における気になる子どもの保護者支援—気になる子どもと似た特性のある保護者の実態把握— 香川大学教育実践総合研究 27, 35－44.
- ・ 中平絢子・馬場訓子・竹内敬子・高橋敏之（2016）事例から見る望ましい保護者支援の在り方と保育士間の連携 岡山大学教師教育開発センター紀要 6, 21-30.
- ・ 垂見直樹・橋本翼（2015） 保育士と研究者との協働における研究課題に関する一考察 近畿大学九州短期大学研究紀要 45, 83－92.
- ・ 垂見直樹・橋本翼（2016）保育者と研究者との協働に関する探索的研究(1)—協働初期における課題と展望— 日本保育学会第 69 回大会発表論文集
- ・ 垂見直樹・橋本翼（2017a） 保育所における保護者との「対話の場」がもたらしたもの（1）—保育士の視点から— 日本保育学会第 70 回大会発表論文集
- ・ 垂見直樹・橋本翼（2017b）「特別な支援」の受容に伴う保育現場の組織変容の萌芽—私立保育所のフィールドワークから— 保育学研究 55(1), 43－54.

附記

調査に協力していただいた保護者の皆様に心より感謝いたします。また、いつも快く筆者を受け入れていただく A 保育園の先生方と子どもたちに感謝いたします。